

令和5年4月18日発行

- 第25号 -

とも たの 偕に楽しむ

ごあいさつ

会長 三ッ石 敏

皆様、お元気でお過ごしでしょうか。この度、広報・研修委員会の皆様のお蔭で、会報「偕に楽しむ」第25号を届けることができました。

11月23日に予定しておりました、令和4年度後半の主要行事の「紅葉狩りウォーキング&偕に楽しむ集い」は残念ながら雨天のため中止になりました。同月には大名庭園民間交流協議会の代表者会議が岡山市で開催され、当会から前会長の湊正雄顧問と私が参加しました。本年2月には、歴史家の久信田喜一先生をお迎えして会員研修会を実施することができました。また、本会と友好関係を持つ東京の小石川後楽園庭園保存会の皆様を観梅の時期の偕楽園にお迎えし、久しぶりに楽しい交流ができました。

令和5年度は、新型コロナウイルス感染症も通常対応に戻り、これまでできなかった様々な事業も実施できる見通しです。5月には小石川後楽園への訪問、11月には高松で開催される大名庭園サミットへの参加に向けて準備して参ります。

本年度も茨城県、水戸市との意見交換を行いながら、継続して我々の想いを伝えていきます。

最後になりましたが、今後とも皆様のご健勝とご多幸をお祈りしております。



花もふれ合いも楽しめます。偕楽園花パートナー活動

好文亭を見上げる偕楽園公園の一隅をお借りして、花パートナー活動が続いています。梅の花の開く頃、花壇の傍の白難波が真っ先に開き、ふくよかな春の香りを漂わせます。会員のコミュニケーションの場であり、散策を楽しむ方々とのふれあいの場にもなっている花パートナー活動。コロナ禍の中での夏の作業は大変でした。やっと屋外活動もマスク解禁となり花々の香りを楽しめます。次年度より水戸市植物公園とタイアップしながら、活動の輪をさらに広げていきたいと思います。

魅力向上委員会



偕楽園の魅力向上を願って茨城県・水戸市との懇談会を開く



県・市との懇談会

偕楽園公園を愛する市民の会では、偕楽園のあり方や魅力向上について、会としての提言を踏まえ、定期的に茨城県・水戸市と話し合う機会を持っています。さる1月24日(火)に水戸市公園協会会議室において、茨城県土木部都市整備課、水戸市公園緑地課のご担当の方々に出席をいただき、本年度第2回目の懇談会を開きました。本会からは三ッ石会長他11名の会員が参加しました。

はじめに、三ッ石会長より本会の発足から今日までの経緯について説明があり、続いて4委員会の委員長から、今年度の本会の活動の概要及びこれからの計画を紹介しました。

県都市整備課からは、「偕楽園を『日本を代表する通年型観光拠点』として魅力向上を図る」の目標達成に向け、令和4年度の取り組みについて次の説明がありました。

①開園180年記念として、利用促進を図るために以下の事業・PRを実施した。

(梅まつり/好文亭内庭公開/講演会/シンポジウム/パネル展開催/梅染めワークショップなど)

②梅まつりに向けては(設備の整備/電子チケットの購入/左近の桜の植樹の準備など)

③4月にオープンするThe迎賓館偕楽園別邸について

懇談会に先がけ、県・市に事前に質問を寄せておりましたが以下の回答をいただきました。

①質問:コロナ禍だが偕楽園及び好文亭のその後の利用状況(カフェを含む)は如何か伺いたい。

県回答:具体的な利用人数は差し控えさせていただくが、確実に利用者は増加している。

②質問:迎賓館偕楽園別邸完成後の隣接する月池や四季の原の活用計画があれば伺いたい。

県回答:現時点では具体的な計画は持っていないが、県としても配慮したい。

③質問:黄門像広場、ボウリング場跡地の駐車場の整備及び進捗状況について伺いたい。

市回答:千波公園(黄門像広場周辺地区)については、市がパークPFI(民間資金を活用した社会資本整備)事業として大和リース・アダストリアグループを設置等予定者に選定し、公募設置等計画に基づき整備を進めている。ボウリング場跡地の駐車場についても施設の供用開始に合わせて現在整備中である。

当会からは次の要望を伝えました。

カフェ「楽」の開業に伴って中断されている月一度の好文亭内での茶会を復活させてほしい。これまで、各茶道の流派の違いを超えて、ボランティアによってすべての市民(および観光客)が「偕(とも)に楽しむ」茶会は、偕楽園の精神の体現であり、亭内での茶会は象徴的な意味がある。ぜひ再開を求めたい。

以上、限られた時間ではありましたが、それぞれの立場に違いはあるものの、偕楽園のさらなる魅力向上を目指して、今後とも県・市との情報の交換や懇談を重ねて参りたいと思います。

シリーズ「偕楽園の梅を知る(3)」

回答は根本実継さん(元偕楽園公園課樹木管理支援員)

質問 紅梅と白梅の違いは、花の色ではなく、材(枝や幹の断面)の色で決まると伺いましたが。

回答 果樹園芸研究家、大坪孝之氏著の『ウメハンドブック』に「ウメは野梅系(野梅性、青軸性、難波性、紅筆性)、緋梅系、豊後系とする。」と記されています。野梅系、豊後系のウメの枝の材は白色で、緋梅系のウメの材は紅色です。例えば、野梅系の「八重寒紅」の花は紅色ですが、材は白色で白梅です。緋梅系の「梅の曙」の花は白色ですが、材は、紅色のため紅梅です。このように花の色に関わらず材の色によって紅梅、白梅と呼んでいます。



窈窕広場前の紅梅

会員研究ノート

偕楽園の魅力を手形から見つめるーその1

西原 昇治

偕楽園は優れた景勝を持つ大名庭園といわれ、金沢市の兼六園、岡山市の後楽園と共に日本の三名園の一つです。造園は、水戸藩第9代藩主徳川齊昭公が、自ら構想を練り創設しました。この時代は、天保の大飢饉や開国もささやかれる混沌とした時世、齊昭公は、庭園造りで何を思ったのでしょうか。偕楽園の今見るすがたから園内を案内します。

表門 表門は偕楽園の北西に位置し、城下から西に向かう、旧岩間街道沿いに当たります。表門、今では交通の便が良いとはいえませんが、当時のまち並みから見ると、南や西に伸びる町並みとつながる好位置と推察されます。表門から園内に進む通路は、沢渡川の河口部の傾斜を生かした変化に富んだつくりです。本来なら、入り口から好文亭まで平らな通路を選べば良いはずです。門を入ると直ぐ下り坂、このような地形のつくりは他ではお目にかかる事は有りませんね。緩やかな坂道の周辺は、杉や孟宗竹が一面を覆い、落ち着いた雰囲気醸し出しています。



南門 創設時は、表門と南門の二カ所から出入りしました。南門は表門に比べて質素なつくりです。どうしてこのような場所に門があるか不思議です。創設当時偕楽園の斜面下は、千波湖が迫っていました。偉いお侍様は、城下の街道を避け、屋敷から直接舟に乗り、ここ南門から偕楽園に入門したのです。急な崖の階段をわざわざ登り、南門、櫓門(くぬぎもん)、芝前門を抜けて好文亭に向かったと推察します。表門からは一の木戸、中門と進みます。門の造りと名称、当時の身分制度によるものかと、深読みできます。特に、南門は質素な佇いでありながら品格が感じられます。



見晴らし広場 見晴らし広場に立つと開放的になります。表門から陰の世界を体験してきましたが、ここは陽の世界です。偕楽園で唯一の建物は、見晴らし広場に造られた好文亭です。好文亭楽寿楼からの眺めは格別です。東に外洋が広がる大洗、南に伸びる江戸街道、西に目をやると筑波の峰を望み、四方を廻る事で、先人達の眺めていた当時の思いが蘇ってきます。偕楽園は大名庭園でありながら池がありません。いや正面に千波湖という池があるのです。また今観る四季の原はかつて湖畔でした。湖畔は水田が広がり四季折々の彩りを見ることができました。常磐神社では稲作の伝統を境内下の湧水を集めて守り続けています。偕楽園公園が三名園として評価されたのは、見晴らし広場から見下ろす景観と、千波湖周辺から好文亭を見上げる景観が見事だからです。



会員の声 私の好きな偕楽園の場所

偕楽園本園でとても好きな場所が2か所あります。1つは表門から好文亭に向かう道筋の柴垣です。ここを通ると源氏物語の若紫の巻で、小さな頃の紫の上が「雀の子を薫籠(ふせご)に入れておいたのに犬君(いぬき)が逃がしてしまった」と言って泣きべそをかいている様子を光源氏が小柴垣のすきまから覗き見る場面を必ず思い出してしまいます。この柴垣は掛け軸の日本画にもよく描かれますが渋くて素敵です。

もう1つは常磐線の車窓から見える「偕楽園」と書いてある木柱の標識の風情です。2か所とも以前から変わらずに偕楽園にふさわしい好景観として存在しているのはうれしいことです。これからもこのような自然素材にこだわる偕楽園にすれば色彩に悩むことなくすべての風景に合致すると思います。

講演会「石河明善の生涯と業績－『石河明善日記』から幕末水戸藩を探る－」を開催しました。



会員講演会 会場写真

令和5年2月5日、水戸市国際交流センターにおいて、幕末期の水戸藩に仕え、弘道館の訓導・助教を務めた石河明善の日記を研究されている久信田喜一先生を講師に迎え、石河明善日記について講演をしていただきました。以下、講師久信田先生の講演の概要を紹介します。

石河幹二郎(明善は号、以下本文では「明善」と記す。)は文政4年(1821年)、水戸藩士石河徳五郎幹忠の第二子として生まれた。幼くして会澤正志斎に入門し、以後その優秀さが評価され、天保12年に(1841)8月には仮開館式が行われた弘道館勤めとなり、2年後に訓導、安政4年(1857)には弘道館助教に上っている。

石河明善日記は、嘉永5年(1852)5月から慶応2年(1866)11月まで記されたもので30冊残されている。日記には、將軍継承問題、安政の大獄、安政の大地震、桜田門外の変など、幕末の水戸藩の動きはもとより、日々の藩士の暮らし向きや当時の社会、経済、文化情勢、さらに晴雨、往来、吉凶までもが詳細に記されている。日記は水戸の重要文化財に指定されており、市史を編纂する上でも非常に重要な資料となっている。

安政の大地震(安政元年(1854))の折は、水戸藩領内の被害は軽微だったものの、江戸は甚大な被害に見舞われ、10万人を超える死者を数え、水戸藩小石川屋敷でも46人の死者が出た。幸い徳川斉昭公は無事であったが、御用人の藤田東湖は地震がもとで圧死している。

明善は、江戸に住む弟や兄の安否を心配し、地震の翌日には江戸に向けて出立し、夜通し歩き続ける途中、馬で運ばれる藤田東湖の屍にも出会った。兄、弟たちの無事を確かめ大いに安堵したが、江戸に見舞いに来た家臣に対して、帰参するよう斉昭から命が下され、止むなく水戸へ戻っている。

安政7年(1860)3月3日に起きた桜田門外の変について、明善は5日早朝、江戸からの早馬で事件の発生を知り、当時の現場の状況や、関係者の動静を克明に記した。さらに、暗殺された井伊家の家臣からの反撃を恐れて、江戸はもちろん水戸城下まで夜回りを始めたことなども記している。

明善は、幕末に起きた水戸藩の政争、騒乱についても克明に記している。後年、水戸藩内の紛争に巻き込まれ、本人自身の身の安全も危うくなり、やむなく水戸を脱走し、明治3年(1870)、白河で病没したという記録が後に残されている。

まるで、当時の世界にいるかのような臨場感溢れる久信田先生のお話は、多くの会員の心を揺さぶりました。講演後、三ッ石会長より、今回の先生の講演が、偕楽園、弘道館を学ぶ上でたいへん有意義な機会となったこと、今後、私たちも明善日記を勉強して参りたいとの謝辞がありました。

小石川後楽園庭園保存会の皆様を偕楽園で歓迎しました。

2月11日から「第127回水戸の梅まつり」が開催されました。コロナ禍もようやく収束に向かう中、今回は久しぶりのフルバージョンの梅祭りとなり、県内外からたくさんのお客様が来園されました。期間中の2月19日、小石川後楽園庭園保存会の皆さまが偕楽園を訪問され、三ッ石会長、湊前会長をはじめ、当会のメンバーがお出迎えし、園内・好文亭を案内しました。梅の花は例年よりも早くほころび、見ごろの梅は少し少なかったですが、冬至梅、虎の尾、高砂枝垂れなどを皆さまに観ていただけました。その後、会員を交えて芝生の上でお昼を摂り、湊前会長を務める石州茶道水戸何陋会が主宰する野点に参加され、楽しいひと時を過ごしていただきました。

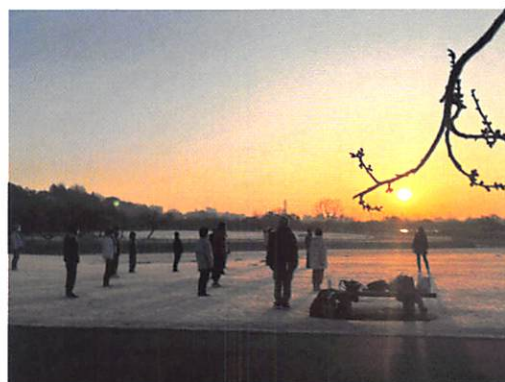


小石川後楽園保存会の皆さんとの歓談

偕楽園公園の魔法につつまれて～朝活

活動を開始してから4回目の冬を迎えました。凍てつく2月、広場の芝生は霜で真っ白です。だんだんと東の空がオレンジ色に染まりはじめ、梅林が影絵のように浮き出される時「偕楽園公園のマジックアワー」が始まります。ほのかな梅の香に優しく包まれて、観梅シーズンでありながら、まだ人影まばらな偕楽園公園を楽しめる最高に贅沢な瞬間(とき)です。やがて丘の上でしんと静かにたたずむ好文亭も朝日を浴び、身体を動かし始める私たちを見守ってくれています。活動開始当初は、参加者が激減する冬場は時間を遅めに設定しようと検討したこともありました。でも、この2月は20名近くもの方々にご参加いただき、朝活が広く人々に浸透しつつあり、より多くの市民に四季を通して偕楽園の魅力を味わって頂けると実感しています。これからの季節は、日差しの力強さや鮮やかな緑に包まれて、「偕楽園公園の魔法」にかかりながら元気に活動を続けて参ります。

- ◎ポスチャー(姿勢)ウォーキングとは身体の姿勢を正しく保ち、きちんと歩くことにより、身体とココロの健康を促進させるウォーキングメソッドです。若々しく健康的にスタイルアップ!気持ちも前向きになります。
- ◎「ヨガ」とはサンスクリット語で「つながり」を意味します。呼吸に意識を向けながら身体を動かすことで快適で安定した心身の状態を目指します。心身をリラックスさせ、ストレス緩和に有効です。



朝日を浴びながら朝活

戸定邸を訪ねて



戸定邸を見学した花パートナーのメンバー

11月10日、予めから花壇作業の後のティータイムで話し合われていた、水戸とゆかりの深い15代将軍徳川慶喜公の弟にあたる徳川昭武公のお屋敷「戸定邸」を訪れる話がまとまり、花パートナー有志12名で訪れました。往復普通列車で車窓の秋景色を楽しみながらの旅でした。メンバーの中の以前松戸にお住まいだったHさんが案内して下さり、展望の良い上層階のレストランで昼食を楽しみ、戸定邸へ向かいます。広い芝生の小高い丘と木々に囲まれた、さすが洋行帰りの昭武公ならではの想いの込められたお庭です。御屋敷も華美ではなく、質素なたたずまいでお人柄の滲みでる設えでした。たまにはこのような息抜きも大切だなあとと思いながら帰途につきました。

梅染め作品展に参加して

3月1日より14日まで、水戸市南町にある「茨城新聞みと・まち・情報館」(水戸証券ビル1階)に於いて、梅染めの展示会が行われました。水戸ユネスコ協会をはじめ、市内の中学・高校・専門学校・大学とのコラボで、若い世代の素晴らしい内容の作品の数々が展示されました。私たちの会からも有志数名が作品づくりと展示に協力させて頂きました。これより前の2月26日には、水戸市国際交流センターにおいて梅染めの実習に参加しました。木綿のハンカチ2枚がきれいに染め上がり春先のスカーフに活用出来そうです。これから、梅染めについて研究を重ね、水戸ならではの特産品に発展させたいと考えています。



会員製作の梅染めの服

委員会だより

思いやりの心を育む弘道館やさしい論語塾

論語委員会



論語講座を受講中の様子ー講師は小堀優先生

平成21年に始まった論語塾が15期目に入りました。令和5年度も安岡定子先生の特別講座はじめ、小坏的り子先生、小堀優先生に年4回ずつ、論語を解りやすく教えていただきます。「論語」は、中国の大思想家、孔子の言行や弟子たちとのやり取りなどを記録した書物です。今から2500年前の言葉ですが、私たちの日々の出来事や生活に重ねられ、思いやりや誠実であることの大切さを教えてくれます。また、弘道館の四季折々の自然を感じながら論語を声に出して読む時間は五感が刺激され心が洗われます。今年度も受講生の皆様に論語の楽しさを味わっていただきたいと思います。

今年度こそ各種の行事が実現するといいですね。

交流委員会

◇研修旅行。コロナ発生前から予定していた小石川後樂園訪問を5月23日(火)に予定していますので、多数の会員の皆様の参加を希望します。齊昭公の種梅記に「南上し梅園の梅を毎年自らの手で採り」とある小石川後樂園への訪問です。申し込み等詳細は4月18日(火)の総会時にお伝えします。

◇大名庭園サミット(大名庭園民間交流協議会)が今年香川県の高松市で11月9,10日に開かれます。主催者(高松栗林公園ガイドクラブ)の意向により、100人程度の規模で開催を予定しています。

◇恒例の「秋の紅葉狩りウォーキング」を11月に予定しています。コースは、昨年残念ながら天候が雨になり中止になりましたコースを巡りたいと思っています。今年は秋晴れの中で開催をしたいものです。



小石川後樂園円月橋

充実した研修を目指します。

広報研修委員会

今年度も専門家を講師にお迎えして、偕楽園や水戸の歴史を学ぶ「会員研修会」や、会員の皆様の専門的な識見に基いてお話をさせていただく「楽習会」を計画しています。また、偕楽園の梅の木・実をテーマにした講座(草木染めの梅染め、菓子づくり)を今後予定しておりますので奮ってご参加ください。

会員の皆様へお願い

○「会員の声」をお寄せください。

今号から始めました「会員の声」のご寄稿を募っています。本会の活動をより活発にするための提案や、偕楽園・弘道館への思いなどを300字程度の文章にまとめて事務局までお送り願います。

編集後記

コロナ禍もようやく収束がみえてきました。しかし、いつまた感染が増加するかもしれないという不安もあります。予測できないものに対応することは難しいですが、日々の適度な運動と、本会への活動に関わることで生まれる人との出会いや繋がりが一番の対応策かもしれないと思う今日この頃です。(H)

偕楽園公園を愛する市民の会 事務局

住所：〒312-0041 ひたちなか市西大島3-14-9 TEL：090-8563-5181/FAX：029-272-8303

発行日：令和5年4月18日 発行：偕楽園公園を愛する市民の会

協力：(株)ロシナンテ ※誌面に関するお問い合わせは事務局まで